

宇治市のシティプレゼンテーション手法
に関する調査研究
(市の魅力発信に向けて)

平成26年 3月

京 都 府 宇 治 市
一般財団法人 地方自治研究機構

はじめに

地方分権の進展、急速な少子高齢化社会の到来をはじめとして社会経済情勢が大きく変化する今日において、地方公共団体を取り巻く時代環境は厳しさを増しています。そのような中で地方公共団体は安心・安全の確保、地域産業の振興、地域の活性化、公共施設の維持管理、行財政改革等の複雑多様化する課題に対応していかなくてはなりません。また、住民に身近な行政は、地方公共団体が自主的かつ主体的に取り組むとともに、地域住民が自らの判断と責任において地域の諸課題に取り組むことが重要となってきています。

このため、当機構では、地方公共団体が直面している諸課題を多角的・総合的に解決するため、個々の地方公共団体が抱える課題を取り上げ、当該地方公共団体と共同して、全国的な視点と地域の実情に即した視点の双方から問題を分析し、その解決方策の研究を実施しています。

本年度は7つのテーマを具体的に設定しており、本報告書は、そのうちの一つの成果を取りまとめたものです。

京都府宇治市は、京都市・大阪市・奈良市という大都市、歴史・文化都市に挟まれて位置していて、古代では貴族の別業地として栄え、現代の高度成長期にはベッドタウンとして急激に人口が増加しながら発展しました。宇治茶、平等院など、十分なブランド力を持った資源はありますが、それぞれが点在していて、必ずしも宇治市全体の共通認識を得る魅力とはなっていない状況です。

こうした背景を踏まえ、本市が今後さらに多くの人に選ばれるまちとなるためには、市民、関係団体、市職員などが共通の危機意識をもち、積極的に魅力発信していく必要があります。数ある魅力が点で存在するのではなく、線となり、全市的な面となって好循環を生み出せるよう、現状を認識した上で有効な手法を検討することを目的としました。

本研究の企画及び実施に当たりましては、研究委員会の委員長及び委員をはじめ、関係者の方々から多くの御指導と御協力をいただきました。

また、本研究は、公益財団法人 地域社会振興財団の交付金を受けて、宇治市と当機構が共同で行ったものです。ここに謝意を表する次第です。

本報告書が広く地方公共団体の施策展開の一助となれば幸いです。

平成 26 年 3 月

一般財団法人 地方自治研究機構
理事長 山中 昭 栄

目次

序章 調査研究の概要.....	3
1 調査研究の背景と目的.....	3
2 市の現状.....	4
3 調査研究の項目と方法.....	5
4 調査研究の体系(検討イメージ).....	6
5 調査研究の体系(本年度の位置づけ).....	7
6 調査研究の視点(CS分析).....	8
7 調査研究の視点(SW分析).....	11
8 調査体制.....	12
第1章 宇治市の概況.....	15
1 地理的・都市的条件.....	15
2 歴史的背景.....	16
3 人口.....	16
4 産業.....	20
5 総合計画概要.....	22
6 宇治市観光動向調査.....	26
第2章 各種調査結果.....	37
1 アンケート調査結果.....	37
2 アンケート調査結果から得られた本市の課題.....	75
3 ヒアリング調査結果.....	76
4 ヒアリング調査結果から得られた本市の課題.....	90
第3章 地元愛着度や宇治市の魅力の維持・向上及び課題解決に向けた方向性の検討95	
1 調査結果から得られた課題と今後の方向性の整理.....	95
2 今後の魅力発信に向けた方向性・取組の検討について.....	98
3 どんな魅力をプレゼンするか.....	99
4 誰に魅力をプレゼンするか.....	100
5 どのように魅力をプレゼンするか.....	101
6 今後の事業展開に向けた課題.....	102
7 住民参加による取組に向けて.....	112
資料編.....	117
市民アンケート調査票.....	117
首都圏等居住者アンケート調査票.....	125
小中学生調査票.....	132
高校生アンケート調査票.....	137
転出入者アンケート調査票.....	140
委員会・事務局名簿.....	147

序章 調査研究の概要

序章 調査研究の概要

1 調査研究の背景と目的

(1) 調査研究の背景

ア 資源の活用

宇治市は、京都・大阪・奈良という大都市、歴史・文化都市に挟まれて位置しており、古代は貴族の別業地として栄え、現代の高度成長期にはベッドタウンとして急激に人口が増加しながら発展した。また、宇治茶、平等院など全国でも有数のブランド力を誇る資源を有し、一定の知名度を得ている。

多くの人に選ばれるまちとなるため、既存資源の一層の活用・再認識と、新たな魅力の創造によりまち全体のブランド力を高める必要がある。

イ これまでの発展基盤の変化

今後は人口減少・少子高齢化が一層進展すると見込まれる。自治会などの地縁団体、地域コミュニティの衰退も懸念され、まちが活力を失い、行政基盤も脆弱化する恐れがある。

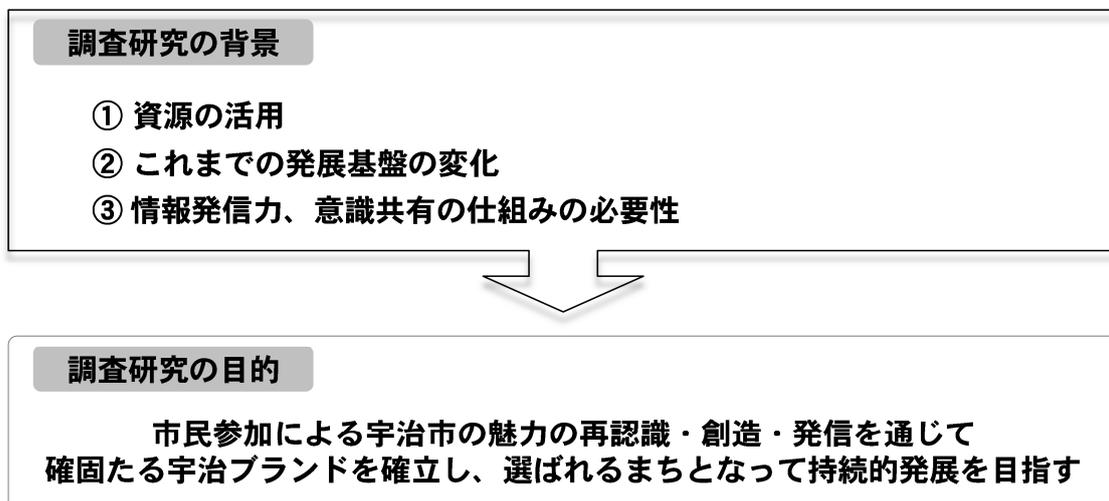
ウ 情報発信力、意識共有の仕組みの必要性

市民、関係団体、企業、市職員など本市に関わる人たちがまちの様々な魅力やまちづくりの意識を共有するとともに、市内外に効果的にまちの情報を発信し、積極的に働きかける仕組みを整える必要がある。

(2) 調査研究の目的

市民参加による本市の魅力の再認識・創造・発信を通じて、
確固たる宇治ブランドを確立し、選ばれるまちとなって持続的発展を目指す

図表 0-1 調査研究の背景と目的



2 市の現状

図表0-2 市の現状

<p>上位計画に見る なりたい姿</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・みどりゆたかな住みたい、住んでよかった都市 (宇治市第5次総合計画「目指す都市像」) ・お茶と歴史・文化の香るふるさと宇治 (" 「まちづくりの目標」) ・環境に配慮した安全・安心のまち (" 「まちづくりの方向性」) ・ゆたかな市民生活ができるまち (" ") ・健康でいきいきと暮らせるまち (" ") ・生きる力を育む教育の充実と生涯学習の推進のまち (" ") ・歴史香るみどりゆたかで快適なまち (" ") ・信頼される都市経営のまち (" ") ・宇治茶に染める観光まちづくり～みんなで淹れる おもてなしの一服～ (宇治市観光振興計画「コンセプト」)
<p>既存調査などから見る 本市の現状</p>	<p>象徴 シンボル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宇治茶 ・宇治の平等院、宇治上神社（世界遺産）、宇治川 ・源氏物語「宇治十帖」
	<p>強み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・14の鉄道駅があり、京都駅から快速で17分の距離にあることなど交通の利便性が高い ・京都・大阪・奈良からの近接性 ・豊富な歴史遺産 ・歴史文化を活かしたまちづくり ・宇治茶、平等院などの十分なブランド力を持った資源 ・豊かな自然 ・ユニチカ、任天堂などの大手企業の立地
	<p>弱み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交通が便利であるがゆえに、仕事・買い物などは近郊都市へ出向く人が多く、昼間人口比率は京都府内市町村でも下位 ・資源が点在している感があり、必ずしも宇治市全体の共通認識を得る魅力とはなっていない ・財政面では特定企業の法人税に依存している弱みがあり、少子高齢化が進むことによって、まちが活力を失い、行政基盤も脆弱化する恐れがある ・まちの情報発信については、統括する部署や全庁的な指針もないため、各部署ごとに取組の情報発信を行い、まとまりがない状況 ・情報発信力の不足(京都観光客のうち宇治エリアを訪問したことがない方の理由として、情報不足が圧倒的に高い) ・市内の駐車場キャパシティの不足や交通渋滞などの課題 ・観光地としての演出不足(駅前に観光地らしさ、宇治らしさ、ウキウキ感が感じられない) ・インバウンド対策不足 ・市民全体でのおもてなし意識が希薄 ・リピーターが少ない ・商品開発力の不足 ・昼間の観光が中心で、夜の観光客は非常に少ない(宿泊は京都市か奈良市)

3 調査研究の項目と方法

(1) 調査研究の項目

- ① 市民の本市への愛着・誇り（シビックプライド）、居住状況・意向の把握
- ② 本市の印象、市内外での都市イメージ、ギャップの把握
- ③ 本市の地域（資源）評価の把握
- ④ 先進事例地域の取組の把握
- ⑤ 本市の魅力発信に向けた方向性の検討

(2) 調査研究の方法

図表 0-3 調査研究の方法

区分	調査名	調査方法	調査内容
調査 1	市民イメージ調査	アンケート	<ul style="list-style-type: none"> ○調査対象：3,000サンプル（15歳以上の市民に無作為抽出） ○調査内容：市への愛着、居住期間、定住意向、市の満足度、市のイメージ、市の資源評価、イベントや地域行事の参加状況など ○調査方法：郵送配布・回収 ○調査時期：平成25年8月～9月
調査 2	首都圏・中京圏・関西圏 居住者調査	アンケート	<ul style="list-style-type: none"> ○調査対象：732サンプル（属性別、調査設定エリアごとに抽出） ○調査内容：訪れたいまち・住みたいまちのイメージ、旅行の行先を決定する際のポイント、魅力的と思う情報発信方法、宇治市と京都市のイメージ、宇治市の資源評価など ○調査方法：インターネット調査 ○調査時期：平成25年9月
調査 3	転出入者イメージ調査	アンケート	<ul style="list-style-type: none"> ○調査対象：平成25年11月～平成26年1月の転出入者 ○調査内容：転出者：転出理由、居住期間、市への愛着・満足度、宇治市の長所・短所・イメージ 転入者：転入理由、宇治市のイメージ、日常生活における重要事項など ○調査方法：転出入届提出者に調査票を配布（留置調査） ○調査時期：平成25年11月～平成26年1月
調査 4	若者イメージ調査	ヒアリング	<ul style="list-style-type: none"> ○調査対象：市内の小中高校生 ○調査内容：市への愛着、定住意向、宇治市の長所・短所、将来望むまちの姿、取り組みたい活動、地域コミュニティについて（高校生）など ○調査方法：総合学習の授業等にヒアリング調査、調査票を配布など ○調査時期：平成25年9月～平成26年1月
調査 5	有識者調査	ヒアリング	<ul style="list-style-type: none"> ○調査対象：宇治市の対外的評価やシティプレゼンテーション手法などに専門的な知見のある有識者 ○調査内容：市への愛着情勢に向けた取組、地域と行政の役割分担、シティプレゼンテーションの流れ、ターゲット設定、宇治市のブランドランキング、強み・弱みなど ○調査方法：ヒアリング調査 ○調査時期：平成25年11月
調査 6	先進事例調査	文献・視察	<ul style="list-style-type: none"> ○調査対象：観光の魅力発信、交流型のまちづくり、地域振興などの先進事例 ○調査内容：地域概況、取組手法、推進体制、取組成果など ○調査方法：文献調査、視察調査（事務局） ○調査時期：文献調査：平成25年8月～10月、視察調査：平成25年12月

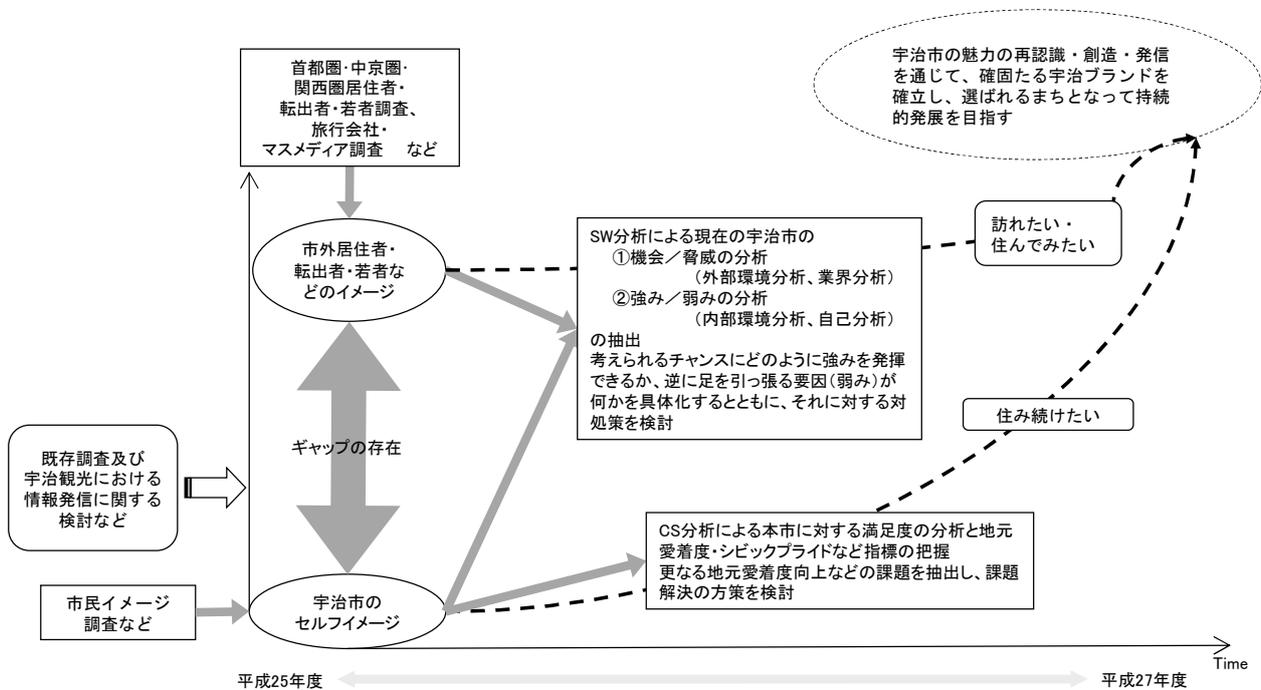
4 調査研究の体系(検討イメージ)

(1) 調査研究の体系 本市の持続的発展へ向けた方向性の検討

生活者、来訪者、専門家などの視点から、生活・文化向上（住み続けたい）と、観光文化交流・定住促進（訪れたい・住んでみたい）の2つの政策領域（観点）で、住民の満足度などの評価、本市の魅力、課題などの抽出を行い「市民参加による本市の魅力の再認識・創造・発信を通じた確固たる宇治ブランドを確立する」方策を検討した。

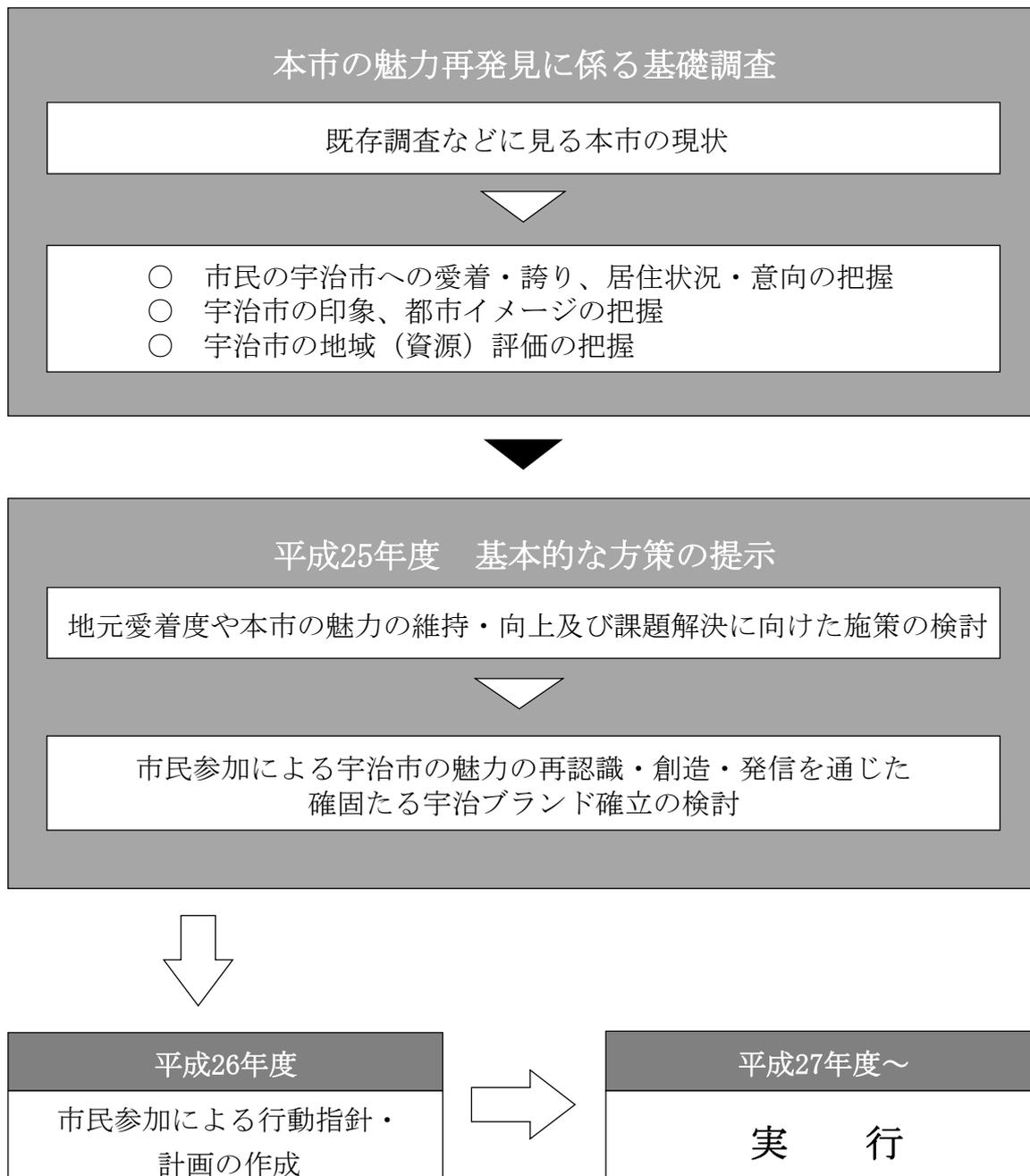
主な分析手法としてSW分析とCS分析を行った。

図表0-4 分析手法



5 調査研究の体系(本年度の位置づけ)

図表0-5 調査研究の体系



6 調査研究の視点（CS分析）

(1) 視点1 生活・文化向上（住み続けたい）

CS分析による本市に対する満足度の分析・把握

地元愛着度・シビックプライドなど指標の可視化

地元愛着度向上などの課題を抽出し、課題解決の方策を検討

※CS（Customer Satisfaction）分析について

ア CS分析とは

各項目の評価と総合評価の相関から、「満足度」のほかに「総合評価への影響の大きさ(重要度)」を定量的に把握する手法であり、マーケティング調査などで用いられる。

今回の市民イメージ調査では、市民愛着度・シビックプライド指標を検討する一環として、「宇治市の満足度」についてCS分析を行った。

イ 満足度

アンケート設問として、本市の生活環境（安全・安心・暮らしやすさ）・観光（自慢できること）・コミュニティ（近所づきあい・イベント参加・広報・HP）などについて、「満足」から「不満」までを5段階で評価した。

満足度は、各項目の「肯定回答(満足・ほぼ満足)」の回答数・割合から算出した。

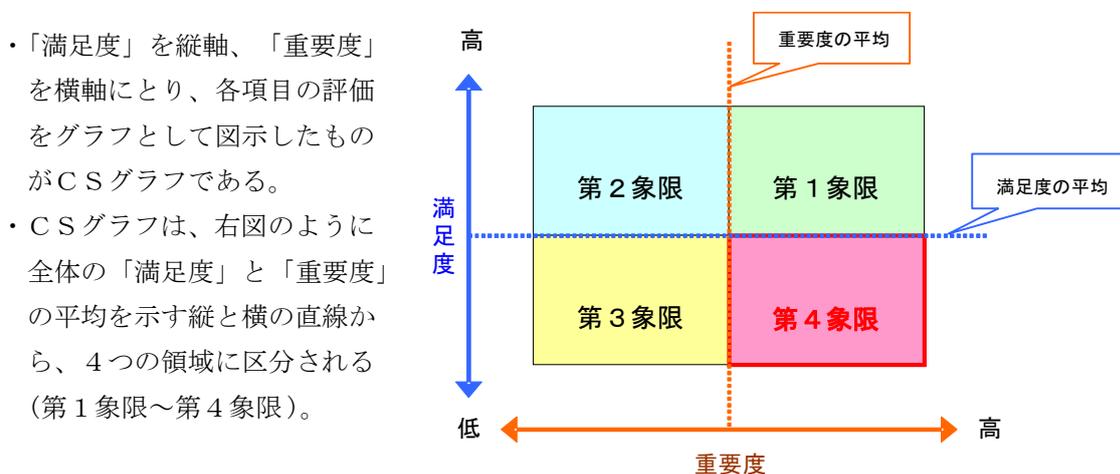
総合評価として本市の愛着度を5段階で評価した。

ウ 重要度

各項目の評価結果と総合評価の相関関係(相関係数：類似性の度合い)を算出し、これを重要度とした。

重要度は0～1までの値をとり、1に近いほど総合評価との関連性が高く、即ち、重要度が高いほど市民愛着度の向上に及ぼす影響が大きい項目と考えられる。

図表0-6 CS分析の各象限



① 【第1象限】満足度と重要度がともに高い領域。

特に新たな施策を講じなくとも満足度は保たれているが、特に重要度の高い項目は、より一層の差別化を図るための施策を講じる価値があると判定。

② 【第2象限】満足度は高いが、重要度は低い領域。

新たな施策を講じなくとも満足度は保たれていると判定。

③ 【第3象限】満足度と重要度がともに低い領域。

新たな施策を講じる優先順位は低いが、満足度が極端に低い項目は、何らかの施策を講じることが望まれると判定。

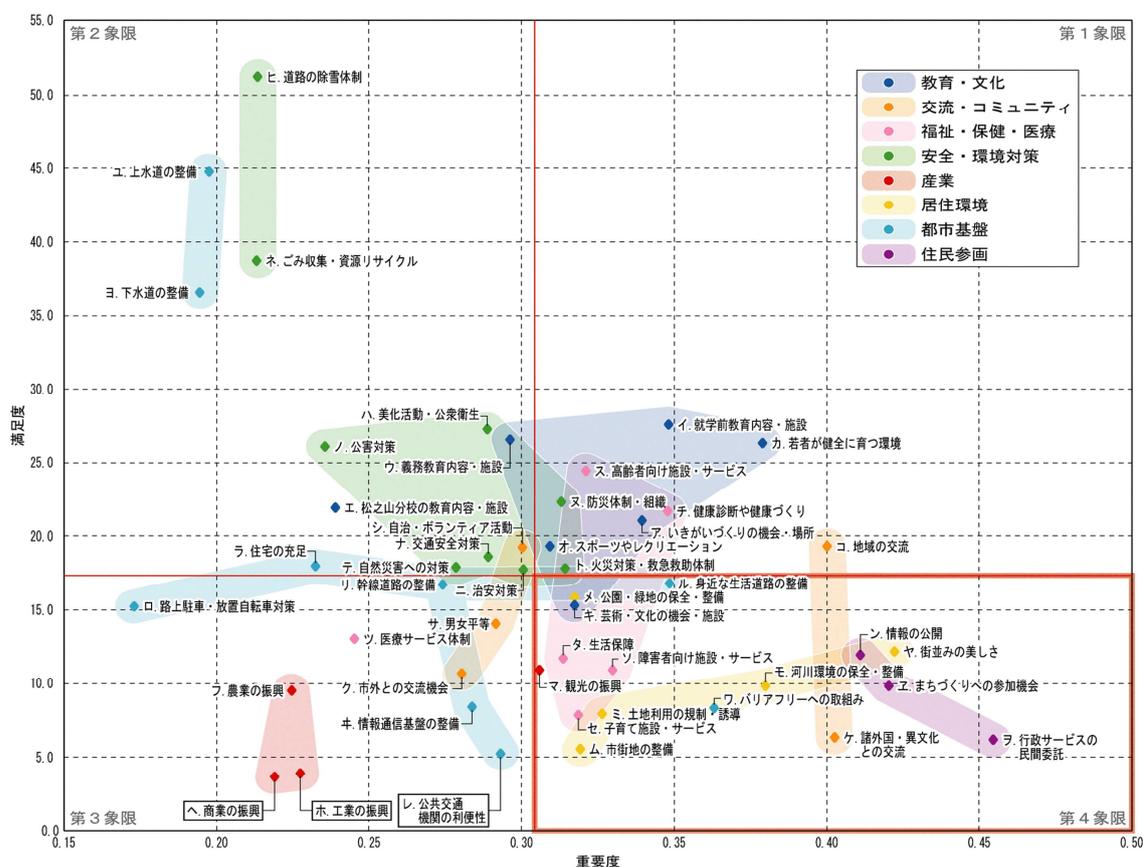
④ 【第4象限】満足度が低いにも関わらず、重要度が高い領域。

この領域に含まれる項目は、優先的に施策を講じる必要があると判定。

優先的に施策を講じる必要性が高い「第4象限」に当てはまる項目に重点を置いた解決方策を検討する。

「第4象限」に当てはまるCS分析・複数設問のクロス集計結果から、地元愛着度向上などの課題を抽出し、課題解決の方策を検討する。

図表0-7 CS分析のグラフィメージ



(2) CS分析結果を踏まえた解決方策の検討

CS分析結果において、優先的に施策を講じる必要性が高い「第4象限」に当てはまる項目に重点を置いた解決方策を検討した。

「第4象限」に当てはまるCS分析・複数設問のクロス集計結果から、ブランド力向上などの課題を抽出し、課題解決の方策を提案する。(例参照)

また、「若者イメージ調査」では、今後のまちづくり活動主体の素地形成を見据え、調査協力者を対象に今後のまちづくり活動への参加を呼びかける。

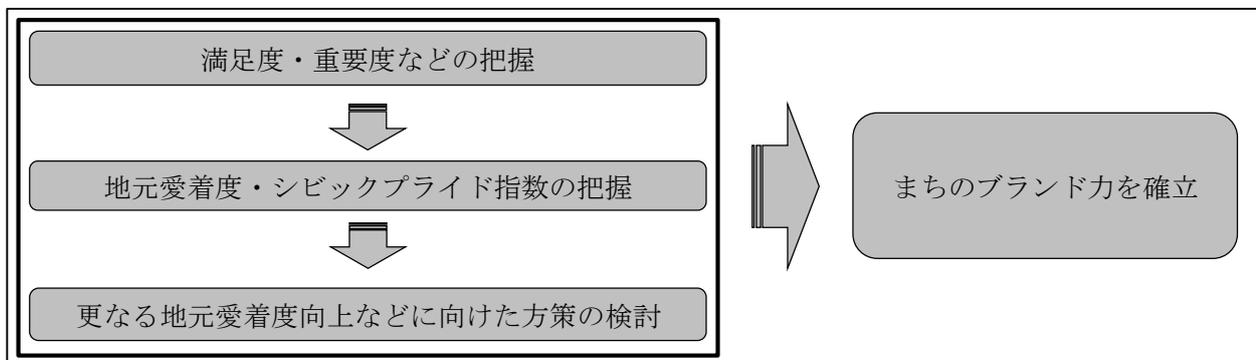
例…

設問に「宇治市の自慢できるところ」を設けた際、回答者の「自慢できる数」と「宇治市の愛着度」に相関があり、回答において「自慢できる数」が少ない傾向にある場合が第4象限に入る項目となる。

つまり「宇治市の自慢できるところ」は、重要度が高く満足度が低いこととなり、“宇治市の魅力を人に伝えられることは大切だが伝えられる市民が少ない”と解釈できる。

この結果を踏まえ、まちづくり活動への意欲が高い層を主体とした「宇治を学ぶ会」「学生による宇治学講座」などの活動を提案する。

図表0-8 CS分析例



7 調査研究の視点（SW分析）

(1) 視点2 観光文化交流・定住促進（訪れたい・住んでみたい）

市内外の多様な評価・意見などの把握

市外居住者・転出者などと市民との比較分析によるイメージのギャップや課題と魅力の明確化

本市の魅力の再認識・創造・発信を通じた確固たる宇治ブランドの確立

(2) SW分析の概要

SWOT分析とは調査対象の強み、弱み、機会、脅威を評価するのに用いられる分析手法である。強み(Strength)、弱み(Weakness)、機会(Opportunity)、脅威(Threat)のそれぞれの頭文字をとってSWOTと言う。

強み(S)と弱み(W)は内的要因(内部環境)分析、機会(O)と脅威(T)は外的要因(外部環境)分析になる。

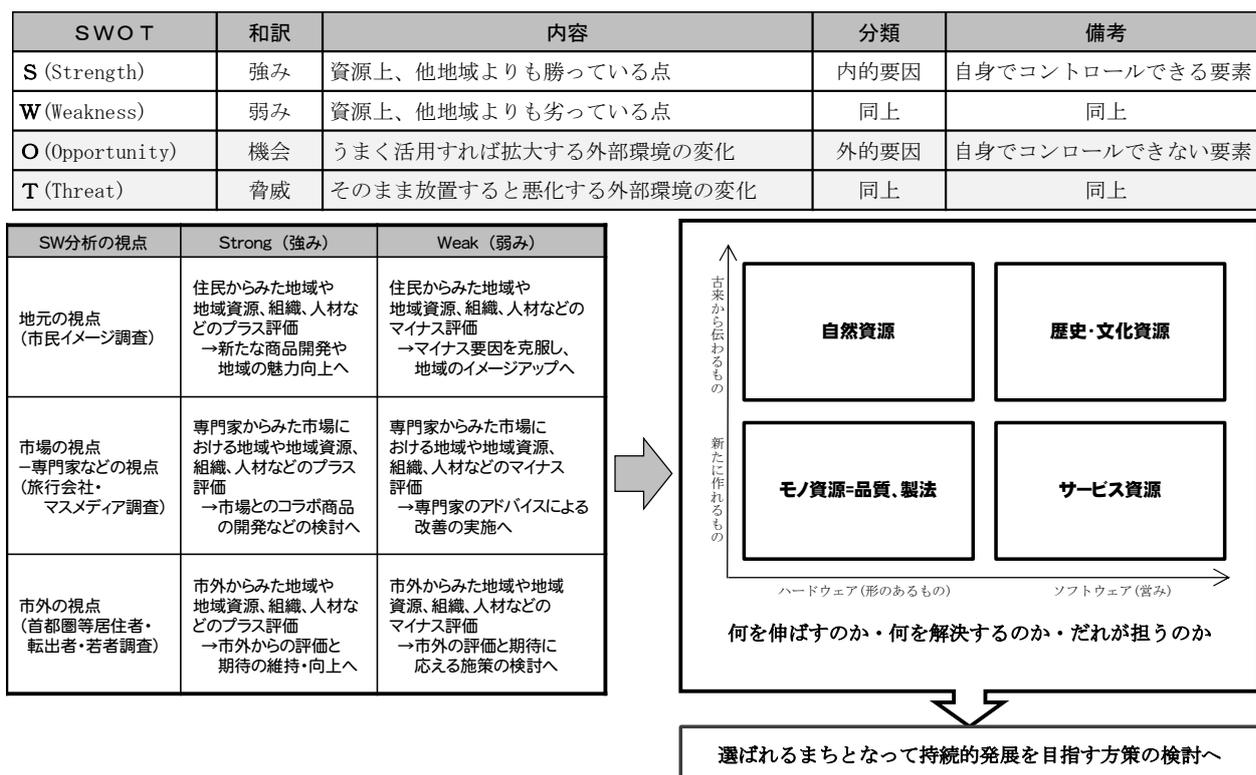
本調査では、特に自身でコントロールできる内的要因を把握し、魅力の維持向上や課題解決に向けた施策の検討へつなげていくこととした。

(3) SW分析結果を踏まえた魅力の維持向上や課題解決に向けた施策の検討

SW分析結果において、アンケート調査や現地調査などから地域資源を洗い出し、これらの地域資源を分析・評価することにより、本市の強みと弱みを把握した。

また、分析の視点としては以下の3つの視点から調査・分析を行い、魅力が見つければ戦略へ(ブランド構築)、課題が見つければその解決へ(ブランド管理)とつなげていくこととした。

図表0-9 SW分析



8 調査体制

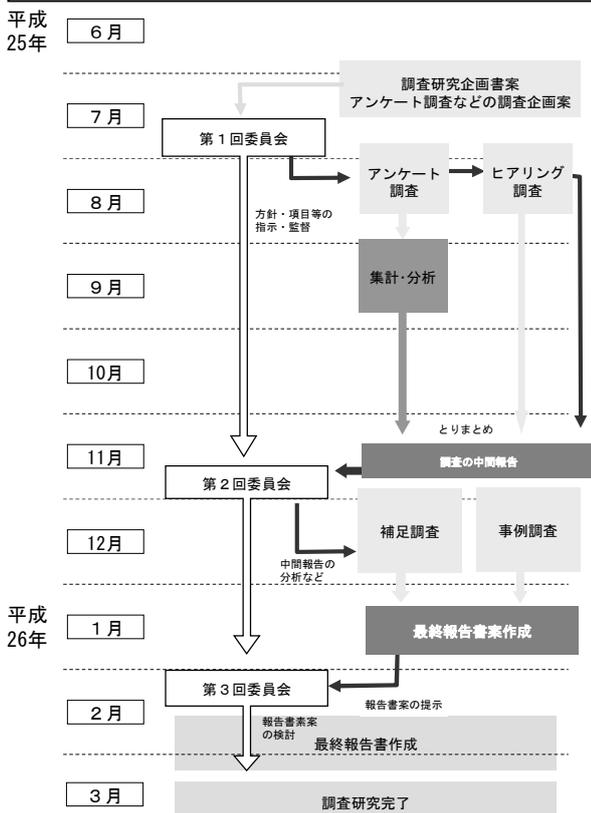
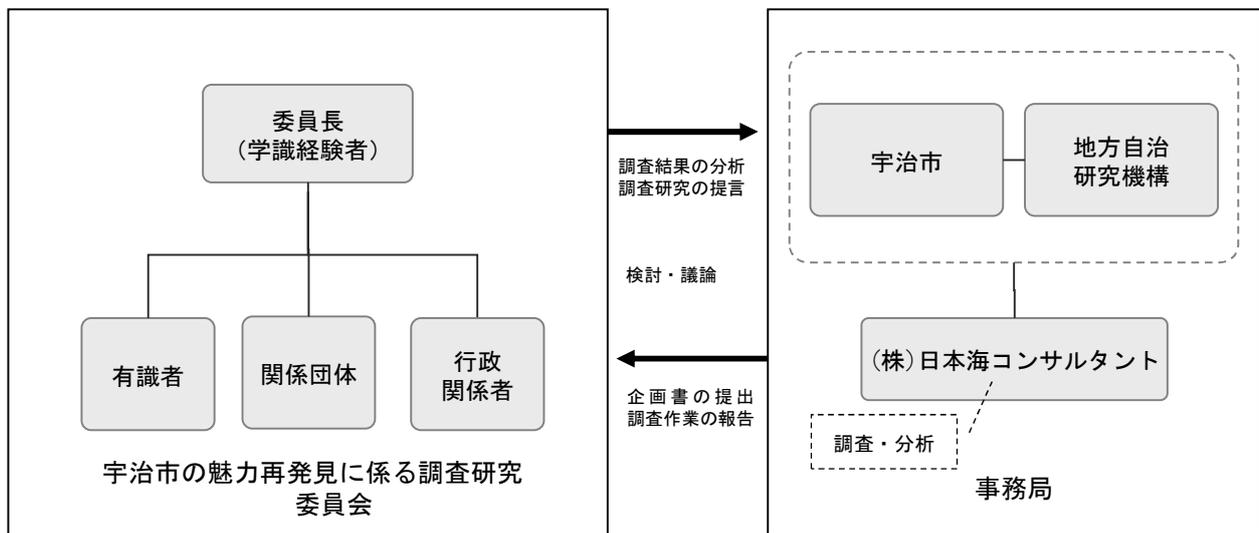
有識者、関係団体、学識経験者、行政関係者などで組織する「宇治市のシティプレゼンテーション手法に関する調査研究～市の魅力発信に向けて～」委員会を設置し、調査研究結果の協議・検討・提案などを行った。

委員会は3回開催した。

委員会の下に、宇治市・地方自治研究機構で構成する事務局を設置し、委員会での審議に必要な資料収集・作成、各種調査研究を実施した。

調査研究の一部を基礎調査機関に委託した。

図表0-10 調査研究体制



○委員会検討内容について

- ・委員会は、平成25年7月、11月、平成26年2月の全3回の開催
- ・各回の検討事項は、以下のもの

	検討事項
第1回 (平成25年7月)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 企画書検討 ■ 調査方法の検討（アンケート調査など） ■ 本市の概況など
第2回 (平成25年11月)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 調査結果などの中間報告（アンケート調査・ヒアリング調査など） ■ 中間報告の分析など <ul style="list-style-type: none"> ・ 評価・分析 ・ 方向性
第3回 (平成26年2月)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最終報告書案検討

第1章 宇治市の概況

第1章 宇治市の概況

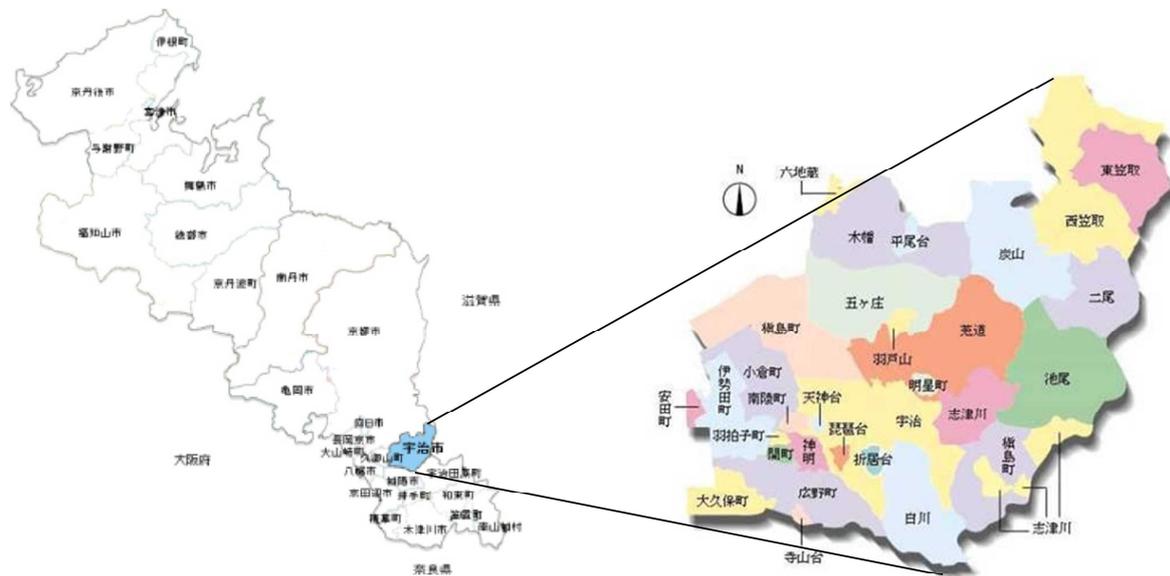
1 地理的・都市的条件

宇治市は、京都盆地の東南部に位置し、京都市の南に隣接しており、面積は67.55km²である。その広がり東西に10km、南北に10.7kmとなっている。

市内には、JR奈良線・近鉄京都線・京阪宇治線の3本の鉄道が通り、交通の便が良いことから京都・大阪の衛星都市として発展してきた。昭和30年代後半からの高度経済成長期には急激な人口増加が続き、それに対する道路をはじめとした都市基盤施設の整備が遅れたため、平成になってから近年まで都市基盤整備をまちづくりの優先的な課題として取り組んできた。

地理的には、東部に豊かな自然環境が残された山麓丘陵地が広がり、西部は巨椋池干拓田に連なる平坦地となっており、琵琶湖から唯一流れ出る河川である宇治川が市中央部を南北に縦断している。市街地は、現在では京都市営地下鉄東西線も加え4本の鉄道が通っていると同時に14の鉄道駅が存在し、高度経済成長期の小規模な住宅地が多数あるなど、細分化されているのが本市の都市構造の特徴となっている。また、宇治川を中心とした景観が国の重要文化的景観に選定されるなど、都市化が進んだ市街地に隣接して歴史的景観が残されている。

図表1-1 宇治市



資料：宇治市第5次総合計画、宇治市HP

2 歴史的背景

京都・奈良の中間に位置した本市は、大化2年（646年）に宇治橋が架けられ、古代から交通の要衝として発展してきた。

平安時代には、風光に恵まれていたこともあり、貴族の別業の地として栄え、源氏物語宇治十帖の舞台にもなっている。この頃藤原頼通が建立した平等院や、現存する最古の神社建築である宇治上神社は、世界遺産にも登録され、華麗な王朝文化を体現できる数少ない都市として、今日に至るまで、多くの観光客を迎えている。

また、古くから交通の要衝であったとともに、宇治川の先陣争いや槇島の合戦など激動する歴史の中でしばしば戦乱の場面に登場している。安土桃山時代となり、天下を統一した豊臣秀吉が伏見城を築くとともに、氾濫を繰り返していた宇治川や淀川の大規模な土木工事を行った。この時に築かれた堤防が、後に太閤堤と呼ばれている。

一方、本市は、室町時代以降茶の産地として名声を馳せている。「宇治茶」は高級日本茶の代名詞とされ、茶業は現在も世界に誇れる伝統産業となっている。

明治時代に入ると、鉄道の敷設や電気事業が起こされ、近代化が図られた。市域の西側に位置する巨椋池の干拓事業は、昭和16年にほぼ現在の形ができ上がった。そして、昭和26年3月1日、本市は当時の東宇治町・宇治町・槇島村・小倉村・大久保村の2町3村の合併によって、人口約3.8万人の市として誕生した。

3 人口

昭和26年に人口約3.8万人で発足した本市は、今日では19万人を超える人口を擁する京都府内第2の都市となっている。

人口増加率と推移を見ると、高度経済成長期の昭和35年～40年には45.6%、昭和40年～45年には50.1%の急激な増加を示しているが、その後は徐々に鈍化し、平成2年～7年では4.3%、平成17年～22年ではわずか0.7%の増加となっており、更に平成24年には19万2,686人となり、これまでの人口増加傾向から微増・横ばい、そして減少傾向へと変化している。

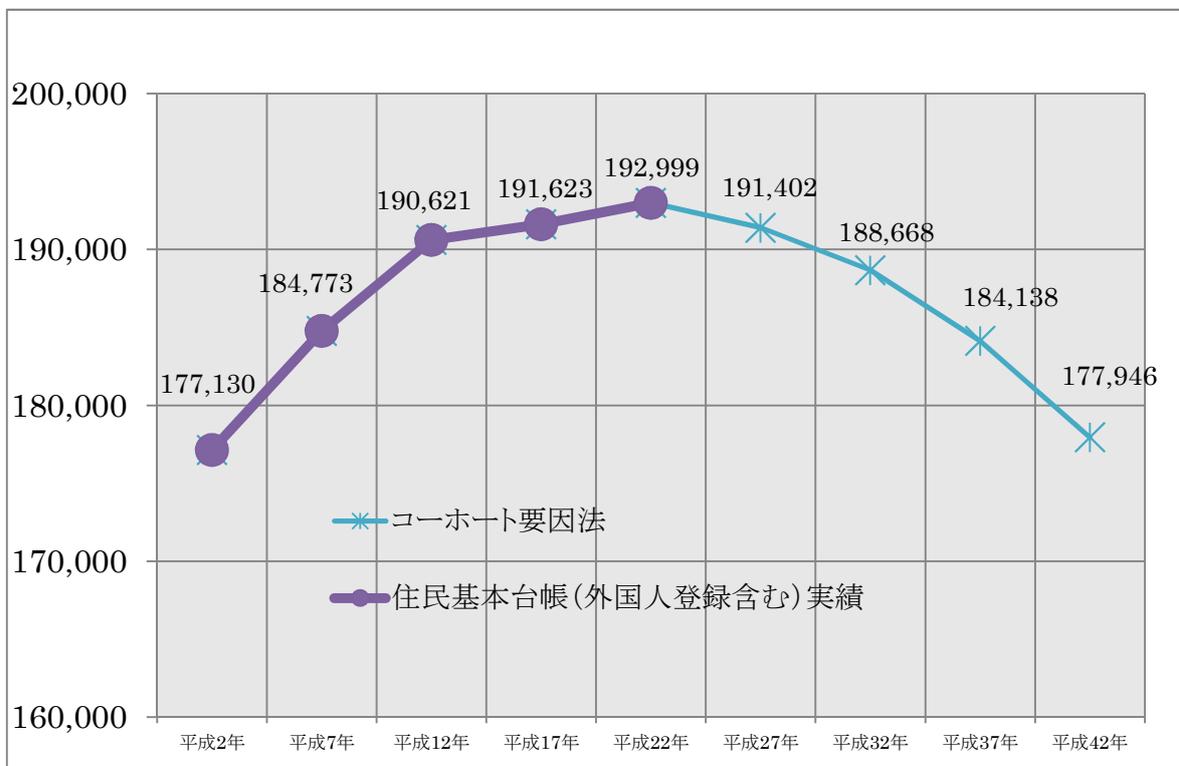
平成24年版高齢社会白書によると、わが国は、世界のどの国もこれまで経験したことのない高齢社会を迎えているとされており、平成23年で23.3%となっている65歳以上の高齢化率は上昇を続け、平成72年には、39.9%に達するとされている。

本市の平成24年の高齢者人口は4万4,348人であり、高齢化率は23.0%となっているが、平成47年には32.1%に達すると見込まれ、急激に高齢化が進むことが予測される。

また、平均寿命が延びる一方で、人口が減少していく中で高齢者が増加することにより、少子高齢化がますます進んでいくことが確実であり、まちづくりはこうした状況を前提にしながら進めていく必要がある。

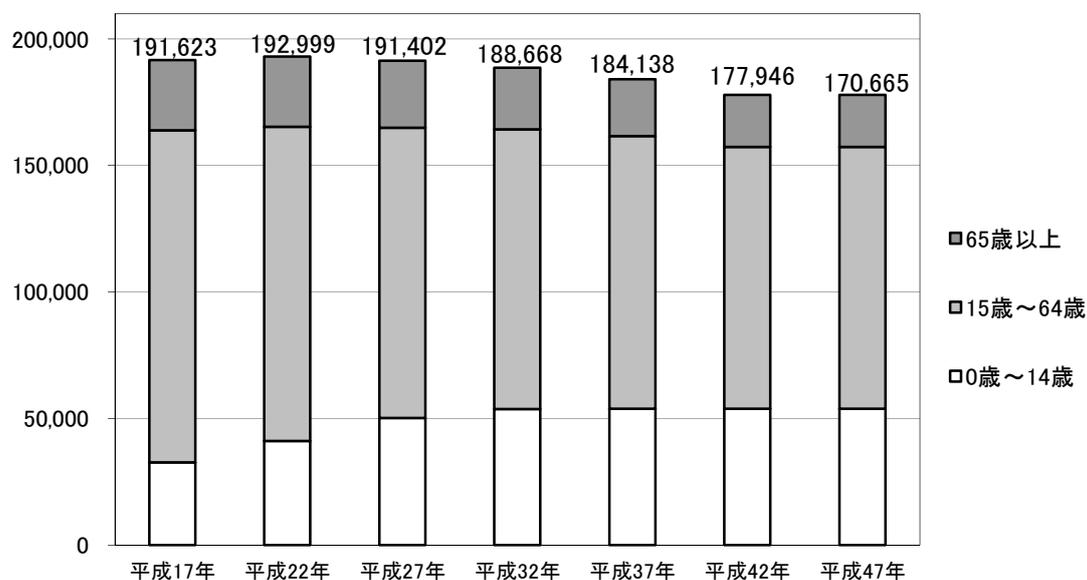
平成25年8月現在での人口推計を行った結果をまとめると、以下のとおりとなる。
本市では、急速ではないが、人口減少が年々進んでいくと推計している。

図表1-2 人口推計結果一覧①



資料：政策推進課

図表1-3 人口推計結果一覧②



資料：政策推進課

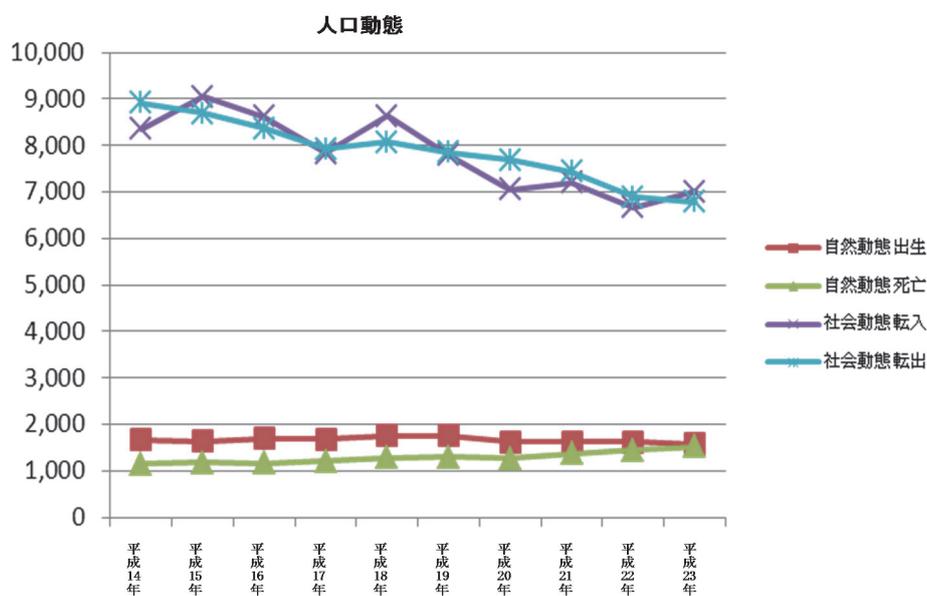
図表 1 - 4 人口推計結果一覧③

	平成17年	平成22年	平成27年	平成32年	平成37年	平成42年	平成47年
65歳以上	32,663	41,104	50,250	53,802	53,879	53,923	54,700
15歳～64歳	131,224	124,234	114,693	110,449	107,788	103,396	96,726
0歳～14歳	27,736	27,661	26,459	24,417	22,471	20,627	19,239
合計	191,623	192,999	191,402	188,668	184,138	177,946	170,665

本市の第5次総合計画は、国全体で減少傾向と予測される人口動向に対応し、市街化地域を拡大しないほか、大幅な人口増加を前提としないなど、情勢に即して策定している。

平成22年国勢調査より前回調査からの人口増減をみると、0.01%増の19万人であり、増減率は京都府内26市町村中5位、36行政区域中9位である。

図表 1 - 5 人口動態①



資料：宇治市統計書（平成24年）

図表1-6 人口動態②

(単位:人、件)

年次・月	自然動態			社会動態			人口増	婚姻 (件)	離婚 (件)
	出生	死亡	増減	転入	転出	増減			
平成14年	1,664	1,151	513	8,356	8,918	△ 562	△ 49	2,070	633
15	1,640	1,183	457	9,050	8,701	349	806	2,119	643
16	1,696	1,163	533	8,618	8,372	246	779	2,047	605
17	1,690	1,218	472	7,836	7,929	△ 93	379	1,975	534
18	1,755	1,279	476	8,632	8,073	559	1,035	2,047	521
19	1,754	1,302	452	7,800	7,856	△ 56	396	1,990	578
20	1,621	1,278	343	7,051	7,695	△ 644	△ 301	1,916	567
21	1,633	1,373	260	7,200	7,443	△ 243	17	1,905	560
22	1,620	1,452	168	6,666	6,886	△ 220	△ 52	1,916	515
23	1,577	1,521	56	7,009	6,783	226	282	1,876	514
1月	127	151	△ 24	375	428	△ 53	△ 77	150	37
2	109	168	△ 59	516	428	88	29	155	50
3	151	122	29	1,510	1,220	290	319	196	59
4	99	121	△ 22	952	837	115	93	141	41
5	140	123	17	554	500	54	71	161	43
6	131	121	10	367	513	△ 146	△ 136	118	45
7	118	116	2	514	489	25	27	149	43
8	165	134	31	435	515	△ 80	△ 49	147	40
9	148	99	49	412	543	△ 131	△ 82	133	34
10	135	117	18	511	466	45	63	154	44
11	138	128	10	385	406	△ 21	△ 11	236	34
12	116	121	△ 5	478	438	40	35	136	44

注1 全て年間の届け数による。

2 全て外国人を含む。

3 婚姻、離婚の届出数は、本籍の有無にかかわらず、宇治市に届けた者及び他市町村からの送付分を含む。

4 社会動態の増減についてはその他を含む。

資料：宇治市統計書（平成24年）

図表1-7 市区町村別流出流入人口（夜間人口、昼間人口）

平成22年10月1日現在

市区町村別 流出流入人口 (夜間人口、昼間人口)	常住人口 (夜間人口) (A)	流出人口 (B)	流出人口		流入人口 (C)	流入人口		流入超過数 (△は流出超過) (C)-(B)=(D)	昼間人口 (A)+(D)=(E)	昼間人口比率 (E)/(A)	
			通勤	通学		通勤	通学				
合計	2,636,092	642,221	554,949	87,272	674,500	553,250	121,250	32,279	2,668,371	101.22%	
京都市	1,474,015	366,163	316,160	50,003	491,185	395,842	95,343	125,022	1,599,037	108.48%	
福知山市	79,652	5,660	5,263	397	10,364	8,734	1,630	4,704	84,356	105.91%	
舞鶴市	88,669	4,881	4,263	618	4,156	3,839	317	△725	87,944	99.18%	
綾部市	35,836	4,622	4,060	562	5,051	4,766	285	429	36,265	101.20%	
宇治市	189,609	50,834	43,761	7,073	27,780	23,293	4,487	△23,054	166,555	87.84%	
宮津市	19,948	2,424	2,190	234	3,852	3,242	610	1,428	21,376	107.16%	
亀岡市	92,399	21,620	18,326	3,294	8,491	7,092	1,399	△13,129	79,270	85.79%	
城陽市	80,037	25,094	21,725	3,369	9,794	8,656	1,138	△15,300	64,737	80.88%	
向日市	54,328	20,300	18,098	2,202	8,505	7,648	857	△11,795	42,533	78.29%	
長岡京市	79,844	25,571	22,484	3,087	19,275	18,455	820	△6,296	73,548	92.11%	
八幡市	74,227	22,777	19,928	2,849	10,851	10,556	295	△11,926	62,301	83.93%	
京田辺市	67,910	20,207	17,230	2,977	22,631	13,272	9,359	2,424	70,334	103.57%	
京丹後市	59,038	3,746	3,284	462	2,156	2,108	48	△1,590	57,448	97.31%	
南丹市	35,214	6,433	5,366	1,067	7,548	6,000	1,548	1,115	36,329	103.17%	
木津川市	69,761	22,738	19,565	3,173	8,303	7,150	1,153	△14,435	55,326	79.31%	
乙訓郡大山崎町	15,121	5,785	5,027	758	4,000	3,991	9	△1,785	13,336	88.20%	
久世郡久御山町	15,914	4,208	3,607	601	16,119	15,178	941	11,911	27,825	174.85%	
綴喜郡井手町	8,447	2,360	1,942	418	1,298	1,296	2	△1,062	7,385	87.43%	
宇治郡宇治原町	9,711	2,993	2,411	582	2,788	2,782	6	△205	9,506	97.89%	
相楽郡	笠置町	1,626	511	403	108	219	216	3	△292	1,334	82.04%
	和束町	4,482	1,121	927	194	400	391	9	△721	3,761	83.91%
	精華町	35,630	13,737	11,536	2,201	5,419	4,798	621	△8,318	27,312	76.65%
船井郡	南山城村	3,078	981	875	106	354	318	36	△627	2,451	79.63%
	京丹波町	15,732	2,895	2,442	453	1,650	1,594	56	△1,245	14,487	92.09%
与謝郡	伊根町	2,410	379	307	72	189	163	26	△190	2,220	92.12%
	与謝野町	23,454	4,181	3,769	412	2,122	1,870	252	△2,059	21,395	91.22%

注1 夜間人口、昼間人口には労働力状態「不詳」を含む。

2 昼間人口には従業地・通学地「不詳」で当地に常住している者を含む。

3 流入人口には他市区町村に従業・通学で、従業地・通学地「不詳」を含む。

4 京都府計は府内市町村の、京都市計は市内行政区の数値を積み上げたもので、京都府内市町村間移動及び京都市内行政区間移動を含む。

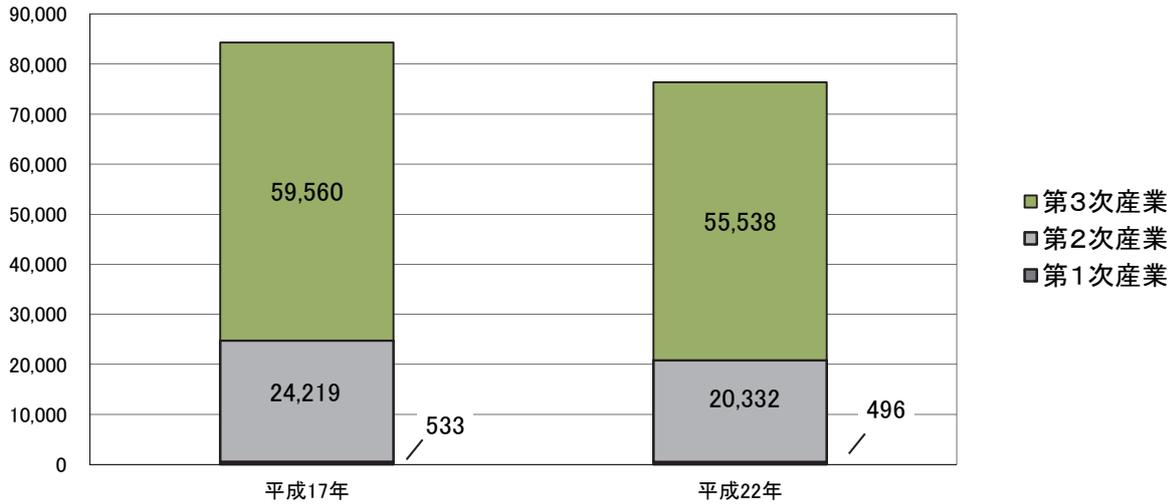
資料：国勢調査（総務省統計局）

4 産業

(1) 産業人口

平成 22 年の国勢調査による産業別就業者数の合計は、8 万 4,684 人で、平成 17 年の国勢調査に比べると 2,141 人の減少となっている。産業別では第 2 次産業で大幅な減少がみられる。

図表 1-8 産業別就業者数



資料：政策推進課

図表 1-9 労働力人口

	平成 17 年	平成 22 年
労働力人口総数	92,678 人	90,221 人
就業者総数	86,825 人	84,684 人
完全失業率	6.3%	6.1%

資料：宇治市統計書（平成 22 年国勢調査）

(2) 農業

本市では、稲作を中心に、伝統的作物である茶の生産及び大都市近郊という条件を活かした都市近郊型農業が行われている。

平成 22 年の農林業センサスによると、経営耕地面積は 212.0ha で、前回の平成 17 年と比べると 22.6%減少している。その内訳は、田は 151.8ha、畑は 15.5ha で、それぞれ前回より減少しているが、樹園地は 44.7ha で前回より 26.3%増加している。また、農業就業人口は 373 人で前回より 28.8%減少し、高齢化も進んでいる。

茶園の面積は、本市統計書によるとほぼ横ばいとなっている。

図表1-10 茶園面積

	総数	煎茶園	玉露園	かぶせ 茶園	てん茶園	幼木園
平成18年	79.1	8.6	19.4	2.2	46.4	2.5
平成23年	77.4	8.6	19.8	2.2	45.2	1.6

(ha)

資料：宇治市統計書

(3) 工業

平成20年の工業統計調査によると、本市内で製造業を営む事業所数は544で、平成17年と比べるとほぼ横ばい、従業者数は1万699人で1.0%の減少、製造品出荷額などは6,816億9,899万円です。9.3%の増加となっています。

従業者数規模別に見ると、事業所数では従業者数29人以下の事業所が全体の約89%を占める一方、200人以上の規模の事業所は1.1%です。しかし、200人以上の規模の事業所は、従業者数では31.6%、製造品出荷額などでは76.8%を占めています。

地域別では槇島地域に事業所数の57.7%、製造品出荷額などの71.8%が集中しています。

(4) 商業

卸業・小売業は、平成21年経済センサス基礎調査によると、全体の81.6%が従業者10人未満の小規模な商店となっています。

平成19年の商業統計調査によると、商店数は前回の平成16年の調査に比べて10.6%の減少、従業者数では1.7%の増加、年間販売額では8.5%の減少となっています。従業者数規模別で見ると、9人以下の事業所数が全体の80.9%を占めており、前回と比較すると19人以下の事業所数が減少しています。

図表1-11 商業の推移

	平成16年	平成19年	増減
商店数	1,710	1,529	-10.6%
従業者数(人)	12,142	12,348	1.7%
年間販売額(万円)	25,634,430	23,461,714	-8.5%

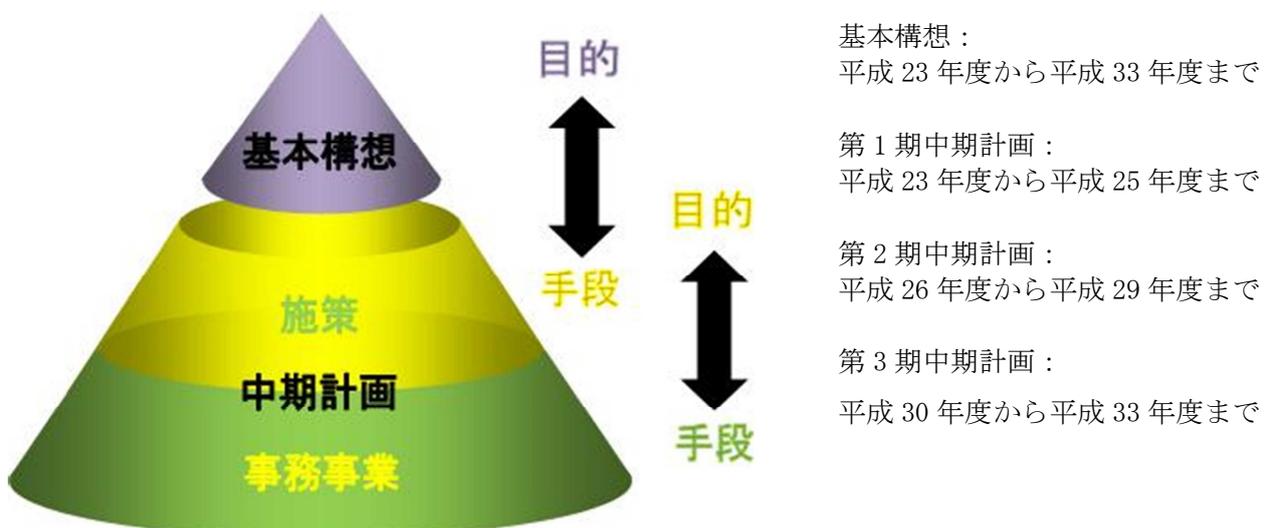
資料：商業統計調査

5 総合計画概要

本市では、昭和 50 年に昭和 60 年を目標年次とする「第 1 次総合計画」を策定し、「みどりゆたかな住みたい、住んでよかった都市」を都市像・まちづくりの理念として計画行政に着手した。そして引き続き、昭和 60 年には、昭和 70 年を目標年次とした「第 2 次総合計画」を策定したが、国際化、高度情報化、高齢化などの社会構造の質的転換が急速に進み、本市においても、広域交通体系の整備とこれに対応する新たな土地利用、並びに産業や観光、福祉や医療、教育、環境などのあらゆる分野で総合的、有機的な施策展開が必要となり、基本構想を含めた総合計画の大幅な見直しが必要となった。そこで平成 3 年から平成 12 年までを計画年次とした「第 3 次総合計画」を策定し、20 世紀の集大成として位置づけ、変化する社会情勢に即応した施策を展開して、道路、公共下水道、公園、鉄道など遅れていた都市基盤施設や少子高齢社会に対応する施設の整備に注力し大きな成果を上げてきた。平成 13 年から平成 22 年までを計画年次とした「第 4 次総合計画」では、時代の変化や厳しい財政状況に適切に対応する中で、第 3 次総合計画における成果を引き継いできた。

現行の第 5 次総合計画は、これまでのまちづくりを引き継ぎながら、地方分権・地方主権時代を迎えるにあたって、市民の参画・参加や市民協働をより一層進め、市民と行政のパートナーシップによる個性あるまちづくりを推進するため、「宇治」の恵まれた自然・歴史遺産・伝統文化を後世に伝え、将来にわたって安全に安心して暮らすことができ、急激かつ大きく変化する社会経済状況に柔軟に対応しやすい実現性の高い計画を目指している。普遍的、長期的な展望に立ち、本市の今後のまちづくりの基本的な方向性を定めた基本構想と、3～4 年の短期で、首長の公約との整合を図りながら急激かつ大きく変化する社会経済状況に柔軟に対応しやすい実現性を目指す中期計画で構成している。

図表 1-12 第 5 次総合計画イメージ



資料：宇治市第 5 次総合計画

(1) 基本構想の考え方

ア 目指す都市像

豊かな自然や歴史・文化遺産を守り育て、未来へと引き継いでいくことによって、そこに住む人々が誇りと愛着を感じることできる「ふるさと宇治」を創造するため、「みどりゆたかな住みたい、住んでよかった都市」を目指す都市像としている。

また、まちづくりの目標として「お茶と歴史・文化の香るふるさと宇治」と設定するとともに、具体的な柱として「環境に配慮した安全・安心のまち」「ゆたかな市民生活ができるまち」「健康でいきいきと暮らせるまち」「生きる力を育む教育の充実と生涯学習の推進のまち」「歴史香るみどりゆたかで快適なまち」「信頼される都市経営のまち」をまちづくりの方向性としている。

イ 目標年次

目標年次を平成33年度、計画期間11年間として策定しているが、社会状況の大幅な変化などが生じた場合には、必要に応じて見直しを行うこととしている。

ウ 将来人口（人口フレーム）

わが国の総人口は、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、平成16年にピークに達した後、長期の人口減少社会に入ると予測されている。本市でも、長期的には同様の傾向となることが予測されるが、平成21年の推計では微増傾向が継続していたため、昨今のこのような状況から、市街化区域を大幅に拡大しないことを前提にして、平成33年度の将来人口は、18.5万人と設定している。

エ 土地利用イメージ

本市は、中央部を南北に流れる宇治川を中心に、東部に広がる山麓丘陵地及び西部に広がる巨椋池干拓田に連なる平坦地で構成されている。市街地は、宇治川及び4本の鉄道と14の鉄道駅があることから、まちが細分化されている。

古い歴史のある建物や町並みが数多く残る一方で、昭和30年代後半以降に開発された住宅地が連なっている。宇治橋周辺地域は、宇治川に代表される自然景観を骨格としながら、重層的に発展した市街地とその周辺に点在する茶園によって構成される茶業に関する独特の景観として、平成21年に国の重要文化的景観に選定されている。また、山間部には豊かな自然が存在し、市街地は工業施設や商業施設が集積する非常に変化に富んだ土地利用が図られている。

土地利用は、これらの自然的、社会的条件を踏まえて、それぞれの地域の特性を活かした都市機能を目指すものとしている。

① 都市中枢地域

本市の中央部に位置する当地域は、行政、市民文化、商業、観光及びスポーツ・レクリエーションなどの中心地であるとともに、文化的景観地域に重なる本市の象徴となる地域である。本市において、行政のみならず、情報発信などを含めた中央玄関口として、都市の中核機能を担う地域としている。

② 歴史と文化の居住地域

宇治川の東岸に位置し、六地藏から菟道に至る当地域は、東部の山麓に沿って豊かな緑を背景に歴史・文化遺産が連なっている良好な住宅地となっている。六地藏地区については、鉄道駅と連携した歩行者空間を形成し、商業施設の集積を誘導して、北の玄関口にふさわしいまちの魅力と活力の向上を図る地域としている。黄檗地区については、黄檗山萬福寺などの歴史的施設・景観の保全とともに、教育文化的施設などと地域の連携によって、住み良いまちの形成を図る地域としている。

③ 産業生産地域

本市の北西部に位置する当地域は、巨椋池干拓田を中心とした広い農業地域と、本市の事業所の約半数が集まる工業集積地、住宅地の地域となっている。

また、京滋バイパス・国道 24 号・京都府道城陽宇治線などに接続する交通結節点にあるという利点を活かして、住環境との調和を図りながら、引き続き都市近郊型農業の振興、企業立地を促進し、本市を担う産業の集積を目指す地域としている。

④ 広域都市機能地域

本市の南西部に位置する当地域は、J R奈良線や近鉄京都線の鉄道、国道 24 号、京都府道城陽宇治線や宇治淀線などの幹線道路が通り交通の利便性が高いことから、住宅・商業・工業など、多様な土地利用がなされている。これらの機能を有機的に結び付けた広域のかつ多機能なまちを形成する地域としている。

大久保地区は、地区内の緑を保全しながら、更に利便性を高め、本市の南の玄関口にふさわしいまちづくりを形成する地域としている。小倉地区は、周辺との連携を図りながら、住宅地を保全、改善するとともに、にぎわいのある商業集積空間を形成する地域としている。

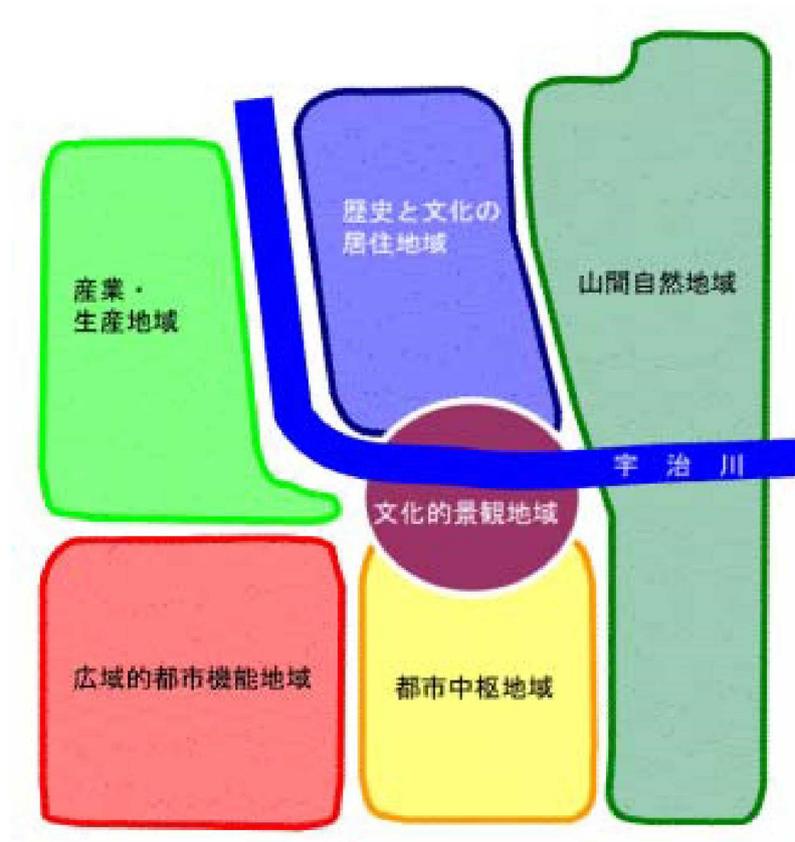
⑤ 山間自然地域

本市の東部を占める広大な山間地域は、豊かな自然が残された地域となっている。市民の貴重な財産として、この豊かな自然を保全しながら、総合野外活動センターや地場産業として定着している陶芸などの資源を活用して、活性化を図る地域としている。

⑥ 文化的景観地域

本市の中央部を南北に流れる宇治川に架かる宇治橋の周辺の当地域は、世界遺産である宇治上神社・平等院に代表される数多くの文化財、宇治川の清流、周辺の豊かな緑と歴史ある町並みが、本市の象徴であるとともに、国の重要文化的景観となっている。白川や黄檗地区も含め、これらの歴史・文化や景観を守り育てるとともに、史跡指定された宇治川太閤堤跡を加えて、観光地としての潤いとにぎわいの創出を図る地域としている。

図表1-13 土地利用イメージ



資料：宇治市第5次総合計画

6 宇治市観光動向調査

(1) 調査の概要

平成 23 年度宇治市観光動向調査は、調査対象及び調査項目、調査機関などに応じ、次の 4 つの個別調査から構成される。

ア 宇治市観光動向調査

宇治を観光で訪問した観光客を対象とする実態調査。

イ 外国人観光客の実態調査

宇治を観光で訪問した外国人観光客を対象とする実態調査。

ウ 京都観光における宇治のイメージ調査

京都市の観光地を訪問した日本人観光客を対象とする、宇治の認知などを把握するイメージ調査。

エ 地元商店調査

本市内の物販、飲食、宿泊などの事業者の外国人観光客受入状況を把握する調査。

それぞれの概要は以下のとおりである。

(2) 調査対象

ア、イ 宇治市を訪れた、外国人を含む観光客

(宇治市内の主な観光関連施設、関連機関施設を利用した人を対象)

ウ 京都市内の主要な観光地を訪れた、日本人観光客

エ 宇治橋商店会、平等院表参道商店会、源氏物語銘店会、塔の島会の各商店会における個別店舗、施設の事業者。また、それぞれ外国人観光客の利用がある事業者。

(3) 調査地点

ア、イ 観光客が多くみられる、JR 宇治駅、京阪宇治駅、平等院正門（北門）、平等院南門、観光センター及び黄檗山萬福寺の各観光施設前

ウ 京都市内、以下の 3 ケ所

「金閣寺正門前、金閣寺道バス停～表参道付近」「東山、高台寺下、ねねの道付近」

「嵐電嵐山駅前付近」

(4) 調査方法

ア、イ、ウの各調査地点共通 路上調査

(専門調査員による観光客に対する調査票配布、観光客の自記入による起票。また、補足を含め、調査員による聞き取りを併せて行った)

エ 調査票記入依頼の上、調査票を配布、留置き、対象各事業者による記入。

調査票留置き 2～3 週間後に回収。

(5) 調査期間

- ア、イ 平成23年11月23日～12月17日（期間内の13日間）、
及び、平成24年1月21日～2月12日（期間内の8日間）、全21日間。
なお、黄檗山萬福寺地点については上記期間内で4日間のみ実施。
調査実施時間はいずれの調査日とも、10時30分頃から16時30分頃まで。
- ウ 平成23年10月16日～10月30日（期間内の7日間）。
調査実施時間はいずれの調査日とも、10時30分頃から16時頃まで。
（ア、イ、ウとも、調査実施日、時間内における降雨時は調査を中断した）
- エ 調査票の配布：平成24年2月6日～2月12日。
調査票の回収：2月20日～2月29日

(6) 調査実態報告の構成

本調査は、来宇観光客の周遊性を考慮し、JR宇治駅、京阪宇治駅、平等院正門（北門）、平等院南門、観光センターの5地点での収集サンプルと、黄檗山萬福寺地点での収集サンプルをそれぞれ別集計した。

また、調査条件は同じながら、日本人観光客とは設問など、異なる調査票を用いた外国人観光客を対象とする調査及び京都市内の主だった観光地で実施した宇治の認知などに関する調査についてはそれぞれ個別の集計情報とした。その上で、京都市内で実施の調査集計情報からは、いくつかの収集情報について宇治市動向調査本編に参考として援用した。

ア 宇治市観光動向調査

「宇治市内調査地点における観光客の実態」

<2,481標本の回答者>

①調査期間別標本数

平成23年11月～12月：1,982 平成24年1月～2月：499

②男女別の構成

男性：1,274 (51%) 女性：1,207 (49%)

③年代層別の構成

19歳以下：39 (2%) 20歳代：466 (19%) 30歳代：432 (17%)
40歳代：390 (16%) 50歳代：466 (19%) 60歳代：554 (22%)
70歳以上：134 (5%)

④居住地の構成

宇治市内：82 (3%) 京都市：186 (7%) 京都府内他市町村：103 (4%)
大阪府：576 (23%) 兵庫県：156 (6%) 奈良県：55 (2%)
滋賀県：80 (3%) 和歌山県：23 (1%)
近畿圏外・不明：1,220 (49%)

⑤行動グループ

単身：395 (16%) 夫婦、恋人同士：844 (34%) 親子、兄弟：149 (6%)
家族：204 (8%) 友人・知人、同僚：738 (30%) 団体ツアー：130 (5%)
その他：21 (1%)

「黄檗山萬福寺地点における観光客の実態」

<109標本の回答者>

①調査期間別標本数

平成23年11月～12月：86 平成24年1月～2月：23

②男女別の構成

男性：49 (45%) 女性：60 (55%)

③年代層別の構成

20歳代：4 (4%) 30歳代：11 (10%) 40歳代：12 (11%)
50歳代：17 (16%) 60歳代：49 (45%) 70歳以上：16 (15%)

④居住地の構成

宇治市内：12 (11%) 京都市：14 (13%) 京都府内他市町村：2 (2%)
大阪府：29 (27%) 兵庫県：8 (7%) 奈良県：1 (1%)
滋賀県：5 (5%) 和歌山県：1 (1%)
近畿圏外・不明：37 (34%)

⑤行動グループ

単身：26 (24%) 夫婦、恋人同士：22 (20%) 親子、兄弟：12 (11%)
家族：9 (8%) 友人・知人、同僚：38 (35%) 団体ツアー：2 (2%)

「宇治市内調査地点における観光客の実態」 調査結果より

- 今回の宇治訪問が「初めて」の人は42%、「5回目以上」、「2回目」がそれぞれ22%であった。
- 今回の観光で、宇治へ「自宅から直接」来た人は66%、「宇治以外の京都」を直前に訪問後来宇した人は29%であった。一方、宇治訪問後「直接自宅へ」帰る人は51%、「宇治以外の京都」を訪問する予定の人が39%であった。
- 来宇の利用交通機関は「JR」が40%、「京阪電車」が25%、「マイカー」が22%であった。
- 来宇観光客の34%が「宿泊」観光で、宿泊者の80%が「宇治市以外の京都」に宿泊、「宇治に宿泊」は宿泊観光客の5%であった。
- 宇治観光の目的では、観光客の78%が「寺院・神社、名所・旧跡」を主目的とし、「自然や風景、まちの景観」を主目的とする人が36%であった。
- 事前の情報収集では「ガイドブック」と「インターネット」を利用した観光客がいずれも37%と多かった。一方、「何もしていない（情報収集していない）」も3割近くみられた。
- 宇治で「飲食した（予定している）」観光客は76%で、飲食の内容では「昼食」が68%、「カフェ、スイーツ、喫茶」が46%の利用であった。
- 宇治で「土産品を買った、予定している」観光客は74%であった。土産品の内容では「お茶（茶葉）」、「和菓子類」が比較的多く、いずれも50%を超えた。
- 宇治で訪問した施設では「平等院」が84%、「宇治上神社」が36%、「宇治神社」が21%、「興聖寺」が14%、「源氏物語ミュージアム」が12%であった。
- 観光客が宇治で最初に訪問した施設をみると、JR宇治駅着及び、平等院南門前駐車場着の観光客ではいずれも80%以上が、また、京阪宇治駅着の観光客についても43%が「平等院」が最初の訪問施設であった。
- 観光客の宇治到着時刻では、10時台及び、11時台がいずれも25%前後と多く、一方、宇治観光終了後の宇治出発予定時刻では、15時台及び、16時台が多かった。宇治の滞在時間は平均3時間21分、平均訪問施設は2.13施設であった。
- 観光関連出費は「宿泊費、宿泊関連費」が一人当たり約1万5,100円、「飲食費」が約1,700円、「土産品購入費」が約2,000円であった。
- 満足度では「寺院・神社、名所・旧跡」、「自然や風景、まちの景観」についてはいずれも満足した人が90%を超える。一方、「観光案内所や観光情報などの情報提供や案内」及び、「交通状況（道路の渋滞など）」について満足した人はいずれも70%に満たない。
土産品について「従業員のおもてなし」、飲食について「食事の内容」及び、「従業員のおもてなし」に関してはいずれも満足した人が80%を超える。

「黄檗山萬福寺地点における観光客の実態」 調査結果より

- 萬福寺地点の観光客は他の調査地点と比べ「夫婦、恋人同士」が少なく、「単身」での訪問が多い。
- 今回の来宇が「5回目以上」が48%、これを含め「2回目」以上の来宇者が80%であった。
(他の調査地点の「2回目以上」の来宇者はリピータは60%以下)
- 宇治来訪前の訪問地は「自宅から直接」が69%、一方、宇治来訪後は「直接自宅へ」が58%であった。いずれも他の調査地点より数ポイント高い。
- 来宇に当たっての利用交通機関は「JR」、「京阪電車」の鉄道がいずれも30%台と多かった。また、「マイカー」利用は20%であった。
- 観光目的は「寺院・神社、名所・旧跡」が89%と他の調査地点より10ポイント以上高かった。

- 事前の情報収集では「インターネット」、「ガイドブック」がいずれも30%台と多かった。一方、「何もしていない」も多くみられた。
- 宇治での「飲食」は54%で他の調査地点と比較し20ポイント以上低かった。また、「土産品購入」は44%に留まり、他の調査地点とのスコアの差がみられた。
- 来宇観光客の宇治で訪問施設数は平均で1.64施設、滞在時間は2時間53分で他の調査地点(訪問施設数=2.13、滞在時間=3時間21分)と差があった。

イ 外国人観光客の実態調査

＜243標本の回答者＞

①男女別の構成

男性：121（50%） 女性：122（50%）

②年代層別の構成

男性（各構成比は男性121人に対するもの）

20歳代：47（39%） 30歳代：41（34%） 40歳代：22（18%）
50歳代：5（4%） 60歳代：6（5%）

女性（各構成比は女性122人に対するもの）

20歳未満：1（1%） 20歳代：52（42%） 30歳代：45（37%）
40歳代：16（13%） 50歳代：6（5%） 60歳代：2（2%）

③居住国、地域の構成

台湾：96（40%） 香港：51（21%） 中国：31（13%）
アメリカ：13（5%） オーストラリア：11（5%） 韓国：11（5%）
ドイツ：7（3%） カナダ：6（2%） フランス：4（2%）
その他：13（5%）

「外国人観光客の実態調査」 調査結果より

- 「訪日経験」は2回以上の観光客が72%、初めての訪日観光客は20%であった。
また、来宇については今回が「初めて」の観光客が80%を超えた。
- 来宇観光客の90%以上が「観光・休暇目的」の旅行の一環であった。
また「友人・同僚と」来た観光客、「家族と」来た観光客がそれぞれ40%台で比較的多かった。
- 来宇の動機では、「寺院・神社」が65%で最も多く、次いで、「宇治茶」が多かった。
- 宇治観光での訪問施設では「平等院」が95%と最も多かった。
日本人観光客と比較すると、「市営茶室・対鳳庵」や「観光センター」の利用率がやや高かった。
- 宇治で「飲食した」人は43%であった。
飲食した人の満足度では、「内容」については満足した人が85%、また、「料金」については74%と日本人観光客の満足度と比較してほとんど差はなかった。一方、「おもてなし」については満足した人が74%と日本人観光客の満足度と比較し11ポイント低いスコアであった。
- 宇治で「土産品を購入した」外国人観光客は55%であった。
購入した人の満足度をみると、「内容」について満足した人は89%と日本人観光客と比較し10ポイント高いスコアであった。一方、「料金」、「おもてなし」については日本人観光客の満足度と比較しそれぞれ低いスコアであった。
- 飲食、土産品のいずれについても「外国語対応」の満足度は低調であった。
(飲食については満足した人が37%、土産品については41%)
- 宇治での出費については、飲食費、土産品のいずれの使途においても一人当たりの利用額で日本人観光客を大きく上回っている。

ウ 京都観光における宇治のイメージ調査

＜ 3 調査地点合計、1,513標本の構成＞

①調査地点別の標本数

金閣寺地点：500 東山地点：503 嵐山地点：510

②男女別の構成

男性：690（46%） 女性：823（54%）

③年代層別の構成

19歳以下：140（9%） 20歳代：442（29%） 30歳代：315（21%）
40歳代：229（15%） 50歳代：201（13%） 60歳代：137（9%）
70歳以上：49（3%）

④居住地の構成

近畿：619（41%） 北海道・東北：87（6%） 関東：347（23%）
中部・北陸：247（16%） 中国・四国：75（5%） 九州：99（7%）
その他・不明：39（3%）

⑤行動グループ

単身：146（10%） 夫婦：287（19%） 家族：329（22%）
知人・友人・同僚：653（43%） 団体・その他：98（6%）

「京都観光における宇治のイメージ調査」 調査結果より

- 訪洛観光客の47%が京都の観光訪問回数が5回以上である。
- 訪洛観光客の宇治訪問経験者は、ほぼ半数（47%）であった。
- 宇治訪問経験者は近畿圏居住者、近畿圏外居住者それぞれほぼ半数であった。
- 訪洛5回以上の人の宇治訪問経験者は約70%であった。
- 宇治訪問経験者の約8割が「寺院・神社、名所・旧跡見学」目的である。
- 宇治未訪問理由では「宇治をよく知らない、情報が少ない」を挙げる人が6割以上であった。
- 訪洛観光客の宇治の施設や特徴についての認知は全般的に高くなかった。
- 訪洛観光客で宇治訪問意向を持つ人は74%であった。
近畿圏居住者では8割、近畿圏外居住者では7割が訪問意向を持っていた。
また、宇治訪問経験者での訪問意向率は8割、一方、宇治訪問未経験者での訪問意向率は7割であった。
- 宇治訪問意向がない理由では「宇治をよく知らない」を挙げた人が過半数であった。
- お茶についての関心では「カフェ・スイーツ」を挙げる人が抜き出て多かった。

エ 地元商店調査

「地元商店調査」 調査結果より

物販事業者 (46事業者のまとめ)

- 物販事業者で観光客を対象とする事業者の90%以上(43事業者)で外国人観光客の利用がある。いずれの店舗でも、アジア、欧米各地域からの観光客の利用がある。
- 店舗での消費額は日本人観光客と比べ差はなかった。
- Webサイトで外国語表記をしている事業者は14%、店舗の看板などで外国語表記を行う事業者は18%であった。
- 商品説明のパンフレット類で外国語表記をしている事業者は38%であった。また、外国語での会話が可能なスタッフを配置しているのは事業者の42%であった。
- 指差しシートなどのコミュニケーション支援ツールを用意している事業者は25%であった。
- 海外発行カード、あるいは、中国銀聯カードの利用が可能な事業者は37%であった。
- 外国人観光客に対する接客のために取組を行っている事業者は9%であった。

飲食事業者 (44事業者のまとめ)

- 飲食事業者の90%以上が観光客を対象とし、そのほぼ全て(43事業者)で外国人観光客の利用がある。アジアからの観光客が利用する店舗が95%、欧米が81%、その他が37%である。
- 店舗での消費額は日本人観光客と比べ差はなかった。
- Webサイトで外国語表記をしている事業者は17%、また、店舗の看板などで外国語表記をしている事業者は21%であった。
- メニューなどで外国語表記を行う事業者は30%であった。また、外国語可能なスタッフを配置する事業者は30%であった。
- 指差しシートなどのコミュニケーションツールを用意している事業者は16%であった。
- 支払いで海外発行カード、あるいは、中国銀聯カードが利用できる事業者は26%であった。
- 外国人観光客に対する接客のために取組を行っている事業者は9%であった。

宿泊施設事業者 (6事業者のまとめ)

- 外国人観光客の消費額は、高額ゾーンの消費が比較的少ない事業者がみられた。
- Webサイトで外国語表記をしている事業者は2事業者であった。
- 館内の主な施設や避難経路の位置や案内で外国語の表記をしている事業者は2事業者、また、客室内の設備の位置や利用説明、館内施設の利用方法、マナーについて外国語表記を行う事業者は3事業者。
- 外国語会話可能なスタッフは67%の事業者が配置、英語の他、中国語簡体字対応は1事業者のみであった。また、指差しシートなどのコミュニケーションツールを用意している事業者はなかった。

- 支払いで海外発行カード、あるいは、中国銀聯カードが利用できる事業者は半数であった。
- 施設利用の利便性向上について実施している事項に関して“インターネット接続”では半数の3事業者が可能、“国際電話の利用”、“外国語でのTV放送”、“周辺地図や観光案内などの情報”についてはそれぞれ2事業者が可能。また、“海外の電化製品などに対応したコンセント設備”、“外国語の案内書提供”について実施するのは1事業者のみであった。
- 外国人観光客に対する接客のために取組を行っている事業者はなかった。